平成19年度教員評価結果【総合分析】

1．提出状況

教員数A	提出者数B	未提出者数C（D）	実提出率
362名	352名	10名 （長期出張者等） 6名	98.9% B÷(A−(D))

小数点第2位四捨五入

【分析結果】

未提出者は，長期出張者等を除き4名であり，提出率は98.9%である。未提出者を生む要因の1つとしては，教員基礎情報データベースシステムの入力データが多岐に亘っており，入力作業の負担が大きいことなどがあげられることから，年間を通してデータベースシステムが開放され，時間がとれる時に常時入力可能であることを周知するなどして，100%の提出を目指したい。

2．領域別評価状況

評価	教育領域	研究領域	組織運営領域	社会貢献領域
A	10.0%	13.5%	11.6%	11.6%
B＋	49.3%	36.8%	30.7%	29.8%
B	37.4%	40.5%	50.5%	43.9%
B－	2.2%	8.4%	2.7%	5.3%
C	0.0%	1.0%	0.5%	1.7%
無評価	1.1%	0.0%	4.0%	7.8%

小数点第2位四捨五入

表示記号と評価

A=特に優れている	B+=普通(プラス) 工学研究科=普通だがやや優れている	B=普通	B−=普通(マイナス) 工学研究科=普通だがやや改善の余地がある	C=改善の余地がある

【分析結果】

別紙のとおり

3．再評価の申請状況（件数）

1件

【分析結果】

再評価の申請件数は，全学で1件である。
申請に基づく再評価は，教員評価実施要領に則り適正に行われている。

4．総合分析

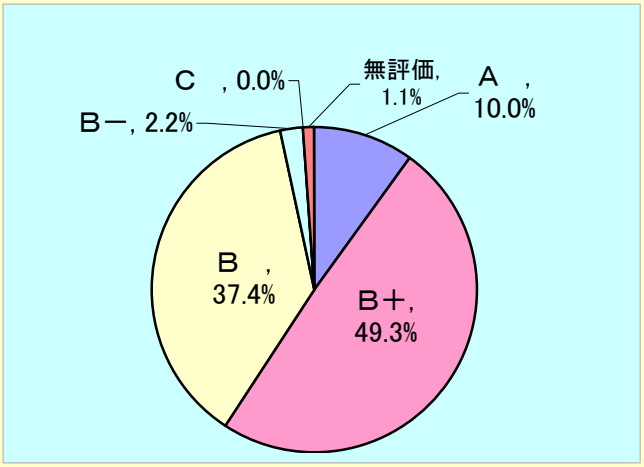
【分析結果】

〇教育領域については，概ね良好であると判断される。研究領域では，自己評価が厳しいなどの評価の個人差もあるが，全体として，改善の余地があるものと判断される。組織運営領域，社会貢献領域では，専門分野の多様性や職階により評価に偏りが生じやすいという傾向がみられる。

以上のことから，研究活動に対し更なる研鑽が求められる。特に，約1割の下位（C又はB−）評価者については，B評価以上への改善の努力が望まれる。

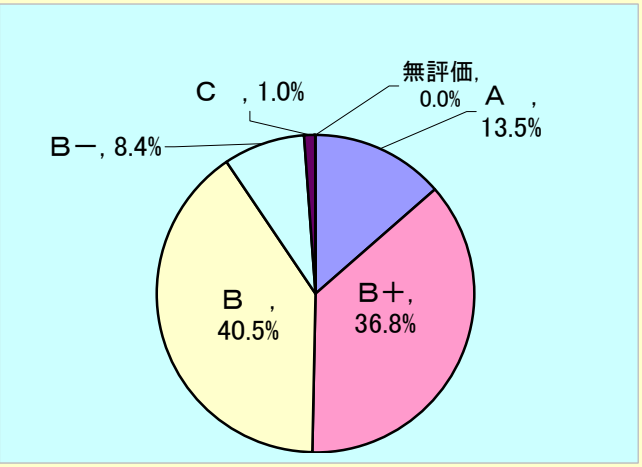
また，各領域でのバランスのとれた活動が理想ではあるが，専門分野や職階等，やむなき要因により，活動に偏りが生じることから，柔軟かつ多様な評価が必要である。

【教育領域】



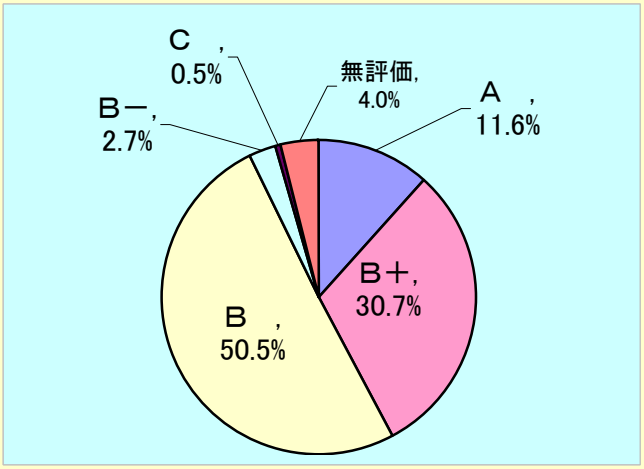
上位評価であるA及びB+の合計が約6割(59.3%)となっており，活発な教育活動が行われていることが伺える。
また，各学部における評価結果の分析においても，授業担当数・担当時間数や授業の工夫など，概ね良好であるとの結果が出ている。
今後も更に活発な教育活動が行われることが期待される。

【研究領域】



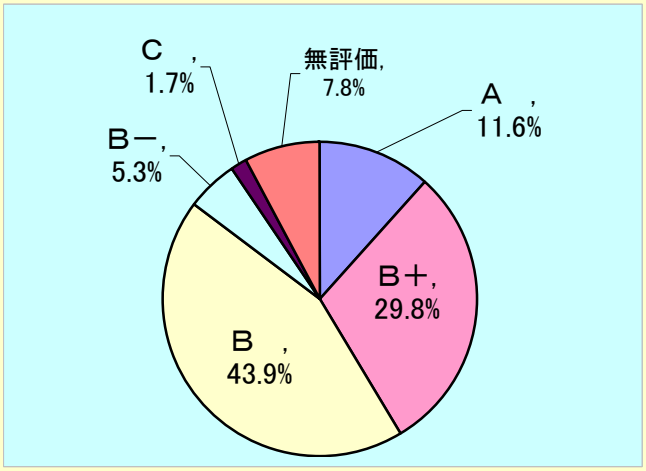
A及びB+の合計は約5割(50.3%)となっており，教育領域に比べると上位評価の割合が低くなっている。これに対し，各学部における評価結果の分析では，自己研鑽の観点から，厳しい自己評価としているとの分析をしている学部もある。
また一方で，下位評価のB−及びCの合計が約1割(9.4%)となっており，一部の教員に改善の余地があると認められる。

【組織運営領域】



大部分の教員が，何らかの組織運営に携わっていることが伺える。しかしながら，全学委員への選出や，学部委員会での委員長への就任，学科長や講座幹事等への就任の状況は，職階により開差がある。また，センター教員は全学委員になる機会がほとんど無いなど，評価に偏りが生じやすい領域である。

【社会貢献領域】



多くの教員が社会貢献活動に携わっているが，学部によっては，専門分野が多様であり，社会貢献に馴染まない分野もあることが指摘されている。また，組織運営領域同様に，職階により活動状況に開差が生じることから，やはり，評価に偏りが生じやすい領域である。